

## 蘭嶼の東京音頭

江波戸 昭

「つぎは日本の歌と踊りです」司会者役の女性の、ききとりにくいマイクを通しての声にいぶかりを感じながらみると、即座にその踊りは始まった。楽器をいっさい持たない地だから、踊り手——それも女性だけ——はいつも歌いながら踊る。歌詞はれっきとした日本語だ。「オドリオードルナーラ、チョイトトーキョーオンド、ヨイヨイ……」いわずと知れた、同行の学生たちも先刻御承知の「東京音頭」だ。踊りも“正調”そのものだが、なにかちがっている。メロディがずれているのだ。われわれが歌っている日本の音階よりも長音階に近い、マレーシア・インドネシア系の、あるいは沖縄でも一部に聞かれるものに変わっている。日本以外のというより日本人社会以外の地で、日本語が最もよく通じるといわれる——実際にそうだったが——この蘭嶼のヤミ族も、言葉は受けいれても、音階は自分たちのものに同化してしまったのである。記録にこそ残しようがなかった音楽が、文書以上に永続性をもつのではないかという文化変容の上での指摘を実感したような感慨を覚えたものだ。

蘭嶼の紅頭村唯一のホテル——といっても男性は一部屋6人、上下の蚕棚ベッド3つに寝たのだが——の前の、海に面した広場兼道路に設定された、ライトも何もない踊り場で催してくれた踊りの会でのことだ。踊り手は“若い女性”（年少の奥様方）12人と“中年の女性”（年長の奥様方）8人の20人、若い方は赤と白、中年は青系の民族衣装に身を固めての熱演である。ヤミ族の踊りとしてよく知られた月見の踊りや髪カミの踊りもさることながら、中年のおばさまたちの動きの少ない踊りを見、単調なかけ声風の歌を聞いて、“あれ、これはどこかで同じようなものがあつたぞ”と思ひめぐらした。それはインドネシアのスラウェシ島、トラジャ族のものだった。同じマレー系の民族が文化的に結びついていて、いっこうにおかしくはないわけだが、台湾からフィリピン諸島を経由してモルッカ海やマカッサル海峡へぬけるマリ

ン・ロードは、意外と新しい時期までかなりの役割を維持していたのではなからうか。

それを裏付ける一つの要素に楽器があるはずなのだが、残念ながらこの島に楽器はない。日本語がベラベラなのを幸い、踊りのあとで“中年の女性”たちと歓談した。「楽器は使わないよ。太鼓も笛もない。男は踊らないでみてるだけだよ」「酒のみながら？」と沖縄や鹿児島のことを考えて質問して気がついた。「あ、そうか。ここは米がないからどぶろくも作れないんだね。イモ（タロ系の水芋が主食）で何か作るの？」「酒なんかないよ。今は台湾からもってくるから、ビールも酒もあるけど。前はなんもなかったよ」

日本の統治時代、この島は“裸島”と名づけられた。男たち、とくにそれなりの年の人は今も禪一本のスタイルだ。漁撈を主要な生業とし、白地に赤と黒で独自の紋様をあしらった小舟でリーフの海に出ていくには、そのスタイルが最もふさわしい。漁に出ない老人たちは、海岸の緩斜面の集落の、半地下式に作られた住居と対照的に、高床式に作られた風通しのよい涼台に登ってタバコをくゆらせながら談笑している。大きめの平たい石を2枚、L字型に置いただけの涼石もある。そこでまたききとりだ。「どこから来たの？そう、東京かい。マブチサンは元気かい。あの先生はいい人だ。だけどあの先生にも外では写真とらせなかったよ。」ヤミ族の写真嫌いは有名だ。馬淵（東一）先生でさえなかなかとらせてもらえなかったようだ。裸のスタイルを興味本位に写して、金を稼ごうという日本人（台湾人も）には、当然のことながら強い反発を感じている。いつの時代にも外からの侵入者は島人の意に反してろくなことをしない。今、蘭嶼のリーフは、本島南端の猫鼻頭ネコノシラに造成された台湾最初の原発の廃棄物のために、島民に内緒で造られ、立入禁止となっている処理場によって、大きく汚染が進んでいるのを知っているのも、禪の漁民たちだけである。

(明治大学)